

アルゼンチンの日本人移住者



アルゼンチンへの移住は 1907年に始められ、戦前に約 5,400人が移住しましたが、その多くは呼び寄せや、ブラジルやペルー等近隣諸国からの転住者でした。

初期の移住者は農園、工場労働者や食堂、洗濯屋の下働きが大部分をしめましたが、大正中頃から洗濯屋、小商店の自営、^{そさい} 蔬菜 (野菜) 栽培者などが現われました。昭和初期になると、^{かき} 花卉 (観賞用植物) 栽培者として独立する者が増え、1940年頃に洗濯業 (クリーニング業)、花卉・蔬菜栽培を主とする今日の日系人社会の基礎ができあがりました。

戦後は 1948 年沖縄県出身者の親族呼び寄せ移住に始まり、1993年までに約 2,800人が移住し、その大半はブエノスアイレス市周辺の日系人花卉・蔬菜栽培業者の呼び寄せによる雇用移住者や、ミシオネス州ガルアペー移住地、メンドーサ州アンデス移住地などへの自営農として移住しています。

アルゼンチン日系人社会の特徴は、沖縄県出身者が多いこと (約 70%)、洗濯業と花卉栽培業が多いこと (約 75%)、ブエノスアイレスおよびその周辺在住者が多いこと (約 80%) があげられます。なお、現在の日系人総数は、約 35,000 人と推定されています。

Argentina

移民船

1960年代までの移住者の渡航手段はもっぱら船でした。移住者をのせた移民船は、神戸もしくは横浜の港から出航し、1ヵ月半～2ヶ月をかけて南米大陸へ向かいました。

1960年代の日本の高度成長により海外移住は減少し、南米への最後の移民船となったのは1973年の「にっぽん丸」でした。



第一回ブラジル移民を載せた笠戸丸（1908年）



星農園での記念撮影（1933年頃、提供：矢島幸男氏）
第一回ブラジル移民としてブラジルへ渡った星清蔵氏（福島県出身）は、アルゼンチン・メンドーサ州へ転住し、果樹園を経営した。



南米への移住者を乗せて横浜港から出航するあめりか丸（1964年、提供：生駒節氏）



出発前の記念撮影（1956年、神戸移住あっせん所）

洗濯業(クリーニング店)

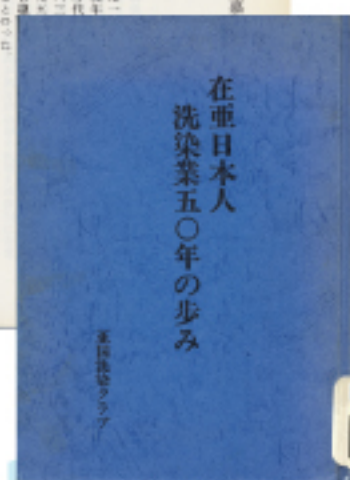
1912年、ブエノスアイレス市に初めての日本人の洗濯店が開店しました。その後1920年代に入ると、多額の設備投資や高度な技術がなくても開業できることから、ブエノスアイレス市だけでなく地方都市へでも日本人の洗濯店が急増しました。多くの店では家族ぐるみで作業にあたり、そのきめ細やかな仕事ぶりが、アルゼンチンでの日系社会への信頼を築く礎になったといわれています。そして「ティントレリア(TINTRERIA: スペイン語で洗濯店の意味)」が日本人の代名詞ともいわれるほどに、日系社会の中心的な職種となりました。



日系人の経営するクリーニング店
(ブエノスアイレス、2001年)



「在亜日本人洗染業五〇年の歩み」(1968年、亜国洗染クラブ)に紹介されている日本人の洗濯店



かき 花卉栽培

1930年代には、優れた農業技術を持つ日本人移住者の指導のもと、日本人の花卉栽培がさかんになりました。日本人花卉農家は新品種の導入や栽培技術研究を行い、高品質のクラベル（カーネーション）、バラ、菊などを栽培し、花卉栽培を新しい産業へと育て上げました。ブエノスアイレス市郊外エスコバル市は、古くから日本人による花卉栽培が盛んだったことから現在は「花の都」と呼ばれ、毎年、市主催の花祭りが開催されています。

日系社会の主要な職業となった花卉産業は、戦後、新たな日本人青年を呼び寄せる原動力となりました。JICAは園芸総合試験場を設立し、カーネーションの無菌苗育成技術の普及などで、花卉栽培農家を支援しました。



菊栽培の温室（1942年、ブエノスアイレス、提供：清水川広清氏）



花卉市場（1944年、ブエノスアイレス、提供：矢島 幸男氏）

日本語教育

移住者にとって、子弟の教育は非常に重要な課題でした。各地の日本人会では日本語学校を開設し、子弟の教育にあたりました。1927年、ブエノスアイレス市には在亜日本人会附属日本語講習会（1937年にはアルゼンチンの文部省認可を得てブエノスアイレス日本小学校に改称）が設立されました。

同校は、第二次世界大戦にともない1945年に閉鎖となりましたが、現在はアルゼンチン公認の私立校「ブエノスアイレス日亜学院」となり、日系子弟だけでなく、日系以外の児童生徒も多く学んでいます。



在亜日本人会日本語学校の先生・生徒・父兄の記念写真
(1932年、提供：辻 武一郎氏)



サンタフェ日本人会日本語学校の創立2周年記念
(1939年、提供：柿栖フアン氏)

ガルアペー移住地 (ミシオネス州)

Garuhape

ガルアペー移住地は、日本海外移住振興会社（JICA の前身）によってアルゼンチンで初めての日本人集団移住地として創設され、1959年に入植がはじまりました。1959年から1965年までに84世帯が入植し、マテ茶やタバコ、柑橘類の栽培を行いました。その後、都市近郊へ転住する移住者が増え、現在は26家族（うち16家族は移住地外に居住）が柑橘類、モモ、木材を生産しています。



山焼き後の空に舞う鯉のぼり



移住者の住居

Argentina

アンデス移住地 (メンドーサ州)

Andes

アンデス移住地は、ガルアペー移住地に続き、二番目の集団移住地として開設され、1962年から入植が開始されました。1966年までに27家族が入植し、モモやブドウなどの果樹やトマトなどの蔬菜の栽培が行なわれました。その後、日本経済の急成長による新移住者の激減と営農不振による転住がすすみ、現在では4家族のみとなりました。



ブエノスアイレスから列車に乗り、アンデス移住地のあるアルベアルオエステ駅に到着した移住者（1964年、提供：生駒 節氏）



ブドウとトマトの栽培（1960年代）

Argentina

農業青年移住

戦後、1953年にアルゼンチンでアルゼンチン拓殖協同組合、翌年には日本で財団法人日本海外協会連合会（のちに海外移住事業団を経て、現在のJICA）が設立されると、一般公募による独身青年の呼び寄せ移住が本格化しました。青年移住者は2年間の契約で花卉栽培農家で働き、技術を身につけた後に、自分の農園を開くなどして、それぞれに独立しました。

海外移住事業団は、ブエノス・アイレス市近郊を中心として計4ヶ所の小移住地を設立し、希望する青年に分譲を行い、その独立を支援しました。



青年移住者と雇用主（1960年代）



独身青年移住者の公募開始が掲載された「海外移住」（1961年、日本海外協会連合会）

日本庭園

ブエノスアイレス日本庭園は、1967年に皇太子同妃両陛下（現在の天皇皇后両陛下）のアルゼンチン訪問を記念してパレルモ公園内に開設され、日本人移民からブエノスアイレス市に寄贈されました。太鼓橋がかけられた池には錦鯉が泳ぎ、多数のツツジや松など日本の植物とアルゼンチンの草木が共生した独特の景観は、ブエノスアイレスの名所となっています。

また、園内には日本人移住者の記念碑「日本移民汗の碑」もあります。



日本移民汗の碑

1979年に改修・拡張工事が行われた際につくられた記念碑。使われている石は、長い間川底で水に洗われ、汗が流れたような跡がついている。



(写真提供：
藤井みゆき氏)

アルゼンチン日本人移住史 デジタル展示サイト

アルゼンチンの日系人団体「在亜日系団体連合会 (FANA)」では、2000年より『アルゼンチン日本人移民史』の編纂が行われ、2006年までに、戦前編・戦後編が、日本語版・スペイン語版で発行されました。

そして、2007年4月7日、編纂の過程で収集された貴重な資料を保存・管理する「アルゼンチン日本人移民資料館」が落成しました。これと同時に、これらの資料をインターネット上で公開する準備もすすめられています。

今回の展示では、このサイトの一部を特別公開しています。アルゼンチンの移住にかかわる貴重な資料の数々が、日本語・スペイン語の両言語で紹介されています。



アルゼンチン日本人移民資料館



『アルゼンチン日本人移民史』 HISTORIA DEL INMIGRANTE JAPONÉS EN LA ARGENTINA

発行：在亜日系団体連合会
Federación de Asociaciones
Nikkei en la Argentina

Argentina